

図書館報

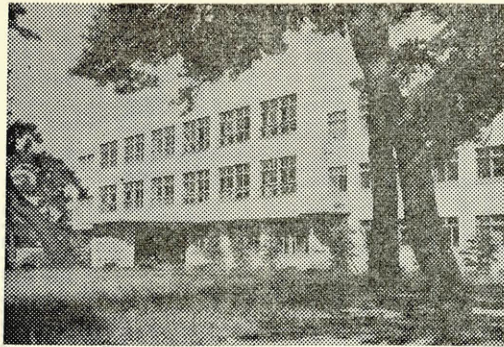
第五号

西南学院創立四十周年記念号
昭和三十一年十月一日発行
発行所 福岡市西新町
西南学院図書館
編集人 山下和夫

西南学院図書館の

現在と理想

館長 里見安吉



私が西南学院につとめるようになってから約十年になるが、その間に間接直接図書館と接觸をもつて来た

その発展の略史は田口欽二氏の編著にゆずり一利用者として見た当図書館は私が専門学校の教授として着任した当時今の高校の片端にある赤煉瓦の二階の建物が書庫になつていて勿論暖房設備のない閲覧室は極めて閑散であり図書の仕事は一丸氏がもつぱら一人でやつていたようである。その後二三の補助員が加つたと記憶する。まことに寒々とした図書館であつた。ルーテル訳独乙語の聖書を参照し度いと思つたが一冊もなかつた。然し当時地下室に似た書庫に入つて一驚したことは未整理のまゝではあつたが故波多野培根氏寄贈のおびたゞしい書物があつて神学哲学文学歴史に関する貴重な文献がかなり沢山あつた。この宝庫の発見は当時の私にとつては一大歓喜であつた

最近日本語にも二三翻譯が出るようになったロシヤの思想家で革命の嵐の中にも強靱な思索をつづけたニコライ・ベルヂャエフの書物が既に波多野文庫の中に数種発見された。私は毎年夏休みの間にその一冊づつを読んで啓発されるところが多かつた。

八田教授が図書館長であつた頃に私も図書委員として協議に参席した。今県立図書館司書をつとめておられる木村秀明氏が当館司書として整理に当り地下室の宝庫も次第に利用の出来るようになった。

中沢慶之助教授の館長の頃社会科系学関係の蔵書の不足を補充することに力がそゝがれた。私は引続き図書委員をつとめていたが、図書冊数の増加とともに館員も増し、中沢館長は館員の精神的な融和厚生にも意を用いられたので私も時には茶菓の饗応に招かれて、感話をさせられた。

昭和二十九年十月に現在の新館が完成し、昭和二十七年から館長をつとめておられた中村弘教授の二期にわたる御苦労が実つて今日の図書館になつてゐる。新館の自由接架式を實施するについては教授間に賛否もごもであつた。その結果につい

て今にわかに結論は出しがたいが、要するに利用者側から言えば自由接架に越したものはないが紛失冊数の増減は直ちに管理者側の責任となるので、こゝに新制度の悩がある。然し対策としては館員を増加して監督を嚴重にすることも一案ではあるが、嚴重な監視のもとに辛じて読書する学生は大学生としての品位の喪失を意味するもので、心地よい図書館ではあり得ない。英国のパブリック・ライブラリーでは一パーセントの消耗率を見ているという話であるが、大学図書館としては紛失冊数の率は直ちに学生の徳性のバロメーターともなるので、パブリック・ライブラリーならぬ大学の教育の場である図書館としてはパブリック・ライブラリーよりも遙に消耗率は下まわらなければならぬ。

加、研究の増進に寄与する結果となる。館長として閲覧者に熱望するところは一人一人の学生がライブラリアンの意識をもつて協力し、図書を尊重し、連带的有機的機能を發揮して理想的図書館を盛りあげて貰うことである。

図書館ニュース

○私立大学図書館協会
先ず五月十二日に昭和三十年度春期関西西部会が名古屋市南山大学の主催で開会された。
五月二十日から二十二日まで三日間総会並びに研究発表会が慶応大学図書館に於て開かれた。

○全国図書館大会
五月二十三日から三日間神奈川県立図書館、音楽堂に於て開催、全国各地より六百数十名が出席、各地域の図書館協会から提出された議題等について討議が交され、盛況であつた。

○福岡県大学図書館協議会
六月二十日総会於九州大学
七月十七日研究会於福岡大学
○西日本図書館学会
七月二十七日佐賀大学に於て総会及び研究発表会を開いた。初めて福岡を離れた総会ではあつたが出席者も多く今後の発展が期待される。

○九州地区大学図書館協議会
九月十三日より四日間大分大学で研修及び協議研究会を開催。

図書館の思出一つ二つ



貞幹生

(一)

大正十四年西南学院英文科を出た私は故郷で別に先生になるアテもなし空と山と森とを毎日見て暮らして居た。学院と友人たちから切りはなされ自分が何か大海原に一枚の枯葉が流されて居る様なりとめのない気分であつた。そこに当時の高等学部長兼英文科長の水町先生からの呼び出し状。西南図書館の専任者として働らけと云うすゝめ。云われるまゝに出福。教室の一つを書庫兼読書室兼事務室としたさゝやかな存在の中で当時図書の係をして居られた小野兵衛先生から事務の処理、図書の分類、取扱、貸出事務などのことを一寸指導されて西南図書館室主任兼事務員兼小使としてつとめの身となつた。しかし図書は低先生方が使用され学生は極めて少数者しか来なかつた。買入れも各先生が割当の予算でわずか宛購入されるので至つて呑気な司書振りであつた。台帳についで、分類して、ラベルをはる位のこと。たゞ当時私のまじい字で書き込んだ書物が今日目につきはせぬかといさゝか不安な気持を持つて居る位で別に思い出として残るものは

同じ書物が何冊でも置いてあつて学生の便に供してある。中々盛んな学生読書風景だつた。

私の最後の一年を過ぎた大学は小さい学校であつたが図書館は開校と同時の歴史をもち百十五年の間に六十万冊の蔵書をもつに至つたと云うことであつた。全部オープンシステムで書庫はエレベーターで各階に自由に出入出来るものであつた。又大学院にはその専用の図書室があつて専門書が自由に使える様に全く開放されて居た。

外国図書館のことで今一つ思い出すことは卒業生の学者や牧師やその他の方々が或は死亡したり引退したりその他何かの都合でよく大部の蔵書がソツクリその出身校の図書館に寄贈されることだつた。或は誰ライブラリーと記念の名がついて居る場合もあつた。もう一つのこととは私の居た学校の図書館がよく古本を売り扱つたことである。同種類の本が沢山ある場合とか、公用としては使用にたえぬといふものを個人の使用にはまだ充分役立つので安く売ればよい。私は或専門のエンサイクロペディアを一箱十二巻と教父全集大冊十冊のを買つた。持つて帰る時の運賃の方がずつと高かつた。

旅行して気付いたことは都市でも田舎の小さい町でも図書館の活動が非常に積極的に行われて居ることだつた。様々な文化的な行事、書物の貸出しなど社会活動の面で重要な指導を行つて居る。本の所有と云うことよりも読むと云うことが書物の第一

一義であることを一面教えられ、その書棚の本だけでは決して充分ではなれと共に図書館の充実を学校もそのないことを反省させられる。他の諸団体も十分に考え教室や個人 (筆者は本学院院长)

清田教授宅訪問

見拜書庫

秋晴れのとある一日、清田教授を自宅に訪問、書庫を見させて戴いた。教授は本学でも蔵書家として著名であり、殊に専門の国文学関係は、珍書蒐集家?として評判が高い。粋な黒罍に囲まれた庭内に入るとすぐ左手に見えるのが目指す書庫である。外部からは全然それとは気付かれない。玄関に直ぐ接しているので案内を乞うと教授自ら招じ入れて下さつた。成程部屋一杯に本の海である。壁という壁には床から天井までぎつしり七段並び一ヶ所小さな明りとりがあるだけで隙間もない。

六畳の和室の中ほどに炬を切つてその上に坐り机が置いてあるがその横にも書棚が立てゝあつて之にもぎつしりと詰つている。「よくこれ程集められましたネ」と先ず感嘆の言葉を洩らす、雑誌も併せるとかれこれ一万冊はあろうか、なんでもまだ不十分でもつと集めたいが意にまかせないとのこと。所で最初に書庫(兼書斎)の設備について採光、照明、通風換気、防音、その他問題となる点を色々伺つた。以前は二ヶ所あつた窓を一ヶ所にしそれも極端に小さくして採光よりも弊害がつまり勉強の気分的基礎を固めることに重点をおいている。通風も適度で殊に冬は炬を切つているので暖房も申し分なし。つまり夏涼しく冬暖かいという快適な処さ。とは勿論教授の自画礼讃である。少しづつ聞いてみると難点も多い。湿度は、特に留意すべき事だネ。最下段の和本など湿つてきて黴が生えて了う。殊に下が砂地なので油虫が出て困る。虫の食つてない本は無い位だ。但しこれは書いてくれるなよ。という次第。

蔵書はなんと云つても国文学関係が大部分で特に平安朝や近世の物語関係、浮世草子関係等を多く集めてある、のが特徴と云えよう。一番御自慢の本は近世初刷書写の落窪物語写本数種だそうである。最後に図書館の国文学関係図書の現状について御批判を乞うと、「充分揃つていますネ。古典の注釈書が今少しあればよいが。」と案外な御返事。お断りしておくが、図書館の国文関係図書の選択委員は教授御自身なのである。礼をのべて教授宅を辞したが、何とも残念でならないのは、著名な珍本に遂に接することが出来なかつたことであつた。(Y)

西南学院図書館に於ても最初の間はNDCが使用されていた。しかしNDCはその名が示すように「日本十進分類法」であつて、和書を分類する為にいられるもので、洋書を分類するには若干の無理があり、文部省の報告に於ても和書はNDC、洋書はDC(「デュイイの十進分類法」)に基いて報告されるのが慣例である。

その無理は何に基因するのであるか。NDCは日本版のDCであり、DCが欧米を背景にした図書分類法であるのに比して、NDCはアジアと欧米の両面を背景とし、然も十進分類法を採用するため細分展開にも一定の限度があるため、直接アジアに不必要と思われるDCの分類項目は遠慮なく切捨ててNDCの中には取入れられていない。従つて少し専門的な然も欧米の図書を集めてこれを分類することになると、NDCでは分類不可能な面が出て来る。こうした点から前述したように和書はNDC、洋書はDCによつて分類した方がよいと云うことになつた。勿論こうした慣例を作ることになつたのは、敗戦当時占領軍の文化工作を担当した米人の意見がDCの使用に大きく影響を及ぼしたからでもあるが同じ種類の本を分類するにあつて和書と洋書とで異つた分類法を使用することは、実際の図書整理上多くの困難をおぼえるものであり、それだけでなくも繁雑であることは致し方ないことである。だからと云つてDCを使えばアジア特有の図書の分類展開が限定されてくる、こゝして和洋両書に共通の分類法を作成し、NDCとDCとをもとの形にさかのぼつて再展開することが望まれるようになる。

本図書館に於ては和洋書共NDCに於つて分類されて来た。DCの職書とともなく、図書館員も少かつたため、こうした手つとり早いNDCによる分類が歓迎されたのは止むを得ないことであつた。しかしここに

図書館案内講座

その四

本館に於ける基督教関係図書の分類について

一つの問題が起つてくる。それは神学科と云う専門図書室の図書を分類するには、どうしてもNDCでは不十分だと云うことであつた。このことを最初に問題とされたのは神学科の図書主任であつた故近藤定次教授である。分類法を何とかもつとすつかりしたものにしたいと当時神学科の図書の整理を担当していた私に相談された。昭和二十六年四月頃のことである。近藤教授は分類の大綱を示され、同志社大学や東京神学大学の分類法を参考にして新分類法を作

成するようにと依頼された。図書館人として従来使用していたNDCの形をくずすことは不手際であると思つたので、NDC及びDCとの相関性を考えながら本分類法を作成した。だから時として「歴史神学に見られるように分目以下四けたまで」と云う無理も忍ばねばならなかつた。即ち例示すれば、左記のような場合が出て来る。しかし出来る限りは毛目までに止めることにした。

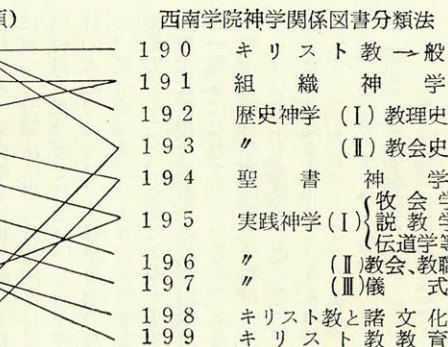
- 1 哲学一(類)
 - 19 基督教一(綱)
 - 192 教理史一(目)
 - 192 3 コラ哲学一(分目)
 - 192 33 全盛期の学一(厘目)
 - 192-381 フランス派一(毛目)
 - 192-3812 聖フランシス ※
- (上記※がそれである)

一つの問題が起つてくる。それは神学科と云う専門図書室の図書を分類するには、どうしてもNDCでは不十分だと云うことであつた。このことを最初に問題とされたのは神学科の図書主任であつた故近藤定次教授である。分類法を何とかもつとすつかりしたものにしたいと当時神学科の図書の整理を担当していた私に相談された。昭和二十六年四月頃のことである。近藤教授は分類の大綱を示され、同志社大学や東京神学大学の分類法を参考にして新分類法を作

現在使用されているのは昭和三十一年一月一日発行の「西南学院神学関係図書分類法」(第一版「基督教関係図書分類表」の改訂版で両者の間には可成りの相違がある)で、以下これに従つて説明しよう。先づNDCと本法とを要目表によつて比較し、その相互関係を表示すると次のようになる。

NDC(要目表中キリスト教の項)

キリスト教	190
教義、神学	191
キリスト、使徒	192
聖書	193
信仰録、説教	194
教会、教職	195
布教、伝導	196
各教派	197
ユダヤ教	198
	199



学、歴史神学、聖書神学、実践神学の四つの神学部門に分つたことは勿論であるが、その中で特にNDCと異つている点は教理史、キリスト教と諸文化、キリスト教々々の三項目を作つたことである。

祝西南学院創立四十周年

新刊書籍・雑誌・教科書

金陽堂

下記に新築移転致しました

福岡市西新脇山通り
電話 ④ 5690番

宮澤美術製本所

金文字入れ、論文、
アルバムその他各種製本

福岡市渡辺通四丁目
電話 ② 0676番

能率事務機と設備

九州ダイアド

株式会社

福岡市住吉向島
電話 ② 636~639

要目表に沿つて本分類法を略説すると190中キリスト教史が歴史神学として192教理史193教会史に分割されている。

191は組織神学とし神以下の項を細目とした。又この中にはキリストの項をキリスト論とキリストの生涯に二分し191に挿入。他にキリスト教倫理キリスト教弁証論をこれに加えた。

192に歴史神学中の教理史を当て、概論以下教父神学より弁証法神学に至る教理史の全容をここに収めることにした。多少不備な点はあるにしても主要な人物は挙げてあるつもりである。特に195.196には日本に於けるキリスト教々々の発展史を記すことにし、日本人の主体的キリスト教把握のあとをたどることにした。

教理史はその多くの点で哲学史と混淆していることが多く、例えばカントやヘーゲルのように哲学者としても重要であるが、神学者としても一時期を画している人々があることはこの区分を極めて困難にしている。

教父哲学、スコラ哲学の如く哲学と神学とが未分離の状態にある時に於て然りである。専門図書室以外の図書館での図書の分類に本法を用いる場合にはカントやヘーゲルは哲学者として哲学史の項に入れるのが適当であろう。これに反してルーテルやカルヴィン等は哲学史ではなくして神学、教理史上の重要人物であり、哲学史と区別した教理史の必要はこうした所に存している。

193は教会史、過去の教会の歴史

をとりあつかうものではあるが、それと共に現在のキリスト教の動きを教派別にその教理、歴史等について見ることとした。

194は聖書に関する一切の研究を含む聖書神学の項である。特にこの中にはキリスト教の前身としてのユダヤ教を旧約聖書の項に含めている。最近問題とされて来た考古学的研究聖地の風俗等をも十分に分類し得る余地をもっている。

195より197までは実践神学として組織神学、歴史神学、聖書神学等主として思想の上で考えられたことが実際の人間の生活の上で如何に現れて来たかについて考えるものである。その中195牧会学や説教学はどうして教会員を牧し、教会員や未信者の人々に説教するかの原理、歴史等を含んでいる。こうしたことは単に一教会、一国内に止らず、外国への伝道として結実する。ここに国内、国外への伝道の歴史、現状を知る部門が必要となつて来る。

196では教会政治、教会法の問題がとりあげられる。キリスト教も現世の中に働くものであり、一方に於て制度を必要とし、他方に於て建物が必要されるのは当然であろう。そのことは現世を離れた修道院に於ても同じで、この項には修道院も含まれている。

197制度化され、建物が出来、一定数の信者が集るとそこには必然的に何らかの儀式が必要となつてくる。儀式は同類を表示する一のものとしてある。196及び197はカトリック的な

奥いの強い箇所であつて、N D CがDCから受け継いだものであり、197はカトリックの七つの秘蹟を中心としている。しかしこうした秘蹟をもたぬプロテスタントにしてもバプテスマや聖餐式の二儀式は守つていて、結婚その他についても一定のキリスト者としての型をもつていて以上こうしたことも研究の主題と考えられる。

198はこの分類法の一の特長であつて、キリスト教と語文化所謂この世との関係、具体的に云えばキリスト教と哲学、歴史、国家、法律、社会、経済、特に共産主義、社会事業、平等の問題をとりあつかつていて、キリスト教と自然科学とも無関係ではなく、キリスト教音楽・芸術・文学等をもここに含めている。このことはキリスト教が単に観念の産物ではないこと、キリスト教信仰は人間の社会に於ける凡ゆる行動・文化と関連をもつていて、否人間の自発的な行動として前者が後者を規制していることを示している。そこに信仰の自由が存在するのであつて信仰のもとで対社会的な一切の問題がここで処理される。

198ではこうした人間のキリスト教に対する肯定的態度、社会に対するキリスト者の積極的な行動はどうしたら与えられるか。信仰は教育によつて与えられるものではない。しかし教育は神を信じた先人について又キリスト教の全般的な歩みについて教えることが出来る。その役目を果たすのが宗教教育、特にキリスト教々々

育てである。それが教会に於て教えられる時、教会学校となり教授法、教案等についての知識が必要となる。又よきキリスト者を育てあげることが最終的な目的とするキリスト教学校がキリスト教教育に果している役割は大きい。そこでは組織、歴史、聖書、実践の諸神学が相助け、相補つてキリスト教々々の使命を達成する上に大いなる役割を果すことになる。

こうした一貫したキリスト教の動きを把握し、キリスト教に関して書かれた多くの文献を分類し整理するに當つて分類法は単に分類法としての役目を果せばそれでいいと云うわけのものではない。基督教研究の為に、又伝道の為に、よりよき態勢を整えて行くこと、そこに所謂キリスト教主義学校及び教会の教育的伝道の一翼になわされているのである「西南学院神学関係図書分類法」にはこうした本来の使命と更にそれを越えた働きをも内包しているものがある。

(文責 神学科司書 田口 欽 二)

本館における図書の分類は原則として日本十進分類法(N D C)第六版に従つてはいるが、その中本館独自の分類を行つているのが以上に述べられたキリスト教とも一つ英木文学関係の洋書である。後者については既に図書館報第二号に説明しているの

祝 西 南 学 院 創 立 四 十 周 年		
印刷の御用は 三陽印刷所 福岡市西新町二丁目295 電話 ④ 1 1 8 番	書架、事務用机、椅子、家具 中上製作所 福岡市西新町三丁目570 電話 ④ 6 5 0 1 番	カメラと D.P.E. 岩崎カメラ商会 福岡市西新町電停前 電話 ④ 8 7 6 6 番

学院創立四十周年

図書館も記念行事計画

より良い将来を願うならば過去へのより深い反省と検討なくしては不可能である。幾多の困難と曲折を経てきた西南学院も、本年は意義ある創立四十周年を迎え、いろいろと記念行事が行われ、又計画されている。

図書館においても、この四十周年記念行事の一つとして、今春すでに石河光哉画伯を学院に招き、ランキンチャペルにおいて、桂離宮とキリシタンと題して、スライド映写による同画伯の解説講演を催す機会を得た。

又学院本部においては西南学院五十年史の編纂が計画されており、その前準備として創立四十周年記念のパンフレット作成が進められている。かゝる歴史編纂には、種々雑多の資料が必要であり、これら資料の蒐集保管という面から図書館の協力が必然的に切望せられ、既に資料保管の中心が図書館内に設定され、館内に保存されている資料の整理に着手した。

これら資料の主なもの、アルバム、学院関係記事のスクラップ、学院新聞、及び各種出版物等である。一昔や二昔前の古いアルバムの中には、まだ若き日の水町前院長やギヤロット先生の見まがらうばかりのお

ない次第である。

西南学院

図書館略史成る

姿も見いだされ、戦時中の苦難の時代の学院の様相の一端も雄々しく織りなされている。スクラップ類は、主として以前学院に居られた松井康秀先生の蒐集によるものであり丹念に集められた先生のこの御奉仕には感謝の外はない。又学院発行の新聞類も、本学新聞会のご協力を得、わずか欠号を含みながらも、創刊号（昭和九年）より、兎も角一応は揃えることが出来そうである。

これらの学院関係資料の整理の仕方、目下考慮中ではあるが、取りあえず利用を容易にするため、リストの作成を期している。

図書館では、今秋この記念行事の一つとして、かゝる資料及び、キリスト教関係の資料（例えば高札、踏絵など）の展示会を催すこととしており、学院の歩いてきた苦難の道や発展の跡を回顧する好箇の資料であるから、是非此の機会に見学された。又、続いて県教育庁の波多江一俊氏の蒐集になる近代美術のスライド映写会も予定されており、多数の参観を希望して止まない。

ともあれ、創立四十周年の喜ばしい記念を祝して行われるこれら多くの行脚が之を契機として更に学院の充実、発展の足がかりとなつてゆくに違いないことを信じ又望んでやま

最初の図書室時代については明確になつていない点もあり、同氏の今後の調査にまたねばならないが、現西南学院長河野貞幹教授が大正十四年短期間ではあるが図書室に勤務されたことや浅香忠良氏による西南学院最初の図書分類法「西南学院図書館蔵書目録」など図書館史の初期を飾る興味深い事実が相当詳細に記されている。

赤煉瓦書庫時代はこれを四期に分つて発展の経過を辿つている。殊に後半期、終戦後ようやく活発化してきた日本の図書館界と対応して学院の図書館の充実、発展がなされたこと、それへの木村秀明氏の図書館人としての業績を取り上げこれを大きくくたゝえている。

思うに学院図書館も此の頃から近代図書館としての活発な動きを開始してきたようである。最後の新館時代は即ち現在であらためて述べるまでもなからう。たゞ将来への展望として、職員、施設、資料の各面から図書館の充実についてより一層の改善を要し、特に現在の学院図書館の不明確な機構を鋭くついている点は注目し、いよう。

大学図書館なのか総合図書館なのか全く不明確な状態が今一度検討を迫られることは必然である。図書館の職制を定める図書館規程案が図書委員会に提出された儘、未だに日の目を見ないでいることもこのことの現れであり、今や運営の上からも図書館の明確な性格が決定されねばならない。

告知板

◇閲覧室の移動

新しい書架の購入を機会に本館では一部閲覧室の移動を行った。

一階閲覧室——自習室、辞書室、教授閲覧室、新聞雑誌閲覧室

二階閲覧室——従来通り

三階閲覧室——一般教養閲覧室

◇卒業論文作成に特別貸出中
卒業論文作成中の学生に対して図書の特貸貸出を行っている。冊数は三冊迄期間は一ヶ月。どしどし利用されたい。

◇卒業論文の製本について
卒業論文は、製本の上図書館に保存することになつていたので、各ゼミで指導教授と協議され、纏めて図書館に持参されたい。尚製本に要する費用は今までの例では大体一人当り百円前後である。

◇複写装置の備付

文献複製の必要から本館にも以前からマイクロ撮影機の備付が要望されてきたが、予算面で非常に困難であるため、過渡的措置としてキヤノン複写装置を購入し当面の必要に当てることとした。テストの結果は、鮮明度もどうやら差支えないようなので複写に手を要する機みはあるが、何とか暫らくは事足りよう。学術文献の複写には何時でも喜んで応ずる態勢を整えているので希望者は館長まで申出られたい。

(一) 赤煉瓦書庫時代

(二) 閉架式図書館時代

(三) 新図書館時代

(四) 開架式図書館時代

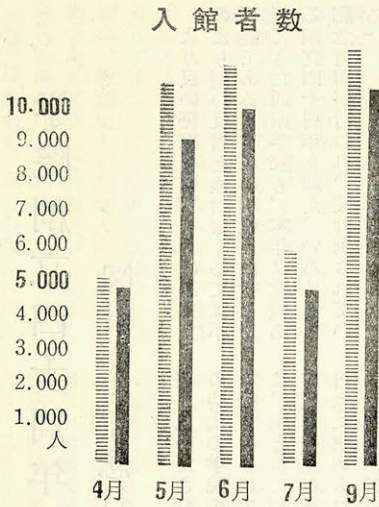
閲覧係より

○昭和三十一年度前期の入館者数を前年度のそれと比較し乍ら左に掲げてみました。本年度は昨年より幾分少いようですが、それでも一日平均の入館者は三百人を超え、最も多い六月と九月は一日平均四百人に達しています。之を本学の学生数千五百人、短大をいれても二千人という数字と比較してみると毎日全学生数の約五分の一の学生が図書館を利用してゐることになり、此の利用率は、他の大学とくらべて非常に高いものと思われます。

○最近図書館内で傘、下駄その他の紛失が時々あることは非常に残念です。一部の不心得な方の悪戯かとも思われます。係員も一層注意します。

○投書に婦人雑誌の購入御希望を寄せられた方がありましたが、以前「婦人公論」と「暮しの手帖」の二つを取つていたのですが(昭和二十六年迄)共に利用者が少ないと予算都合で取止めになつてしまつたのです。当時に比べて女子学生も多い現在一考の余地があると思ひますので暫らくお待ち下さい。

昭和31年度
昭和30年度



○来春三月卒業予定の方に卒業の御記念として又後輩の方々のために是非図書をお贈り下さるようお願い致します。一冊でも二冊でも結構です。

すが、利用者も所持品に気をつけて下さい。

○閲覧室での雑談はやめましょうお互いの勉強の妨げとなるだけでなく、図書館の雰囲気そのものが壊されてしまいます。

○前期は月曜日と金曜日に午後九時半まで閲覧時間を延長していましたがチャペルとの関係上後期は之を火曜日と金曜日に致します。

○学生の御希望が多い所から「商業英語」Business Englishを復刊第一号より全部購入致しましたので御利用下さい。

○投書に婦人雑誌の購入御希望を寄せられた方がありましたが、以前「婦人公論」と「暮しの手帖」の二つを取つていたのですが(昭和二十六年迄)共に利用者が少ないと予算都合で取止めになつてしまつたのです。当時に比べて女子学生も多い現在一考の余地があると思ひますので暫らくお待ち下さい。

学院創立40周年記念

11月1日(木) 午後1時—3時
ランキンチャペル
題名未定
福岡近郊の史蹟
講師 波多江一俊氏

映画とスライドの会

(入場無料) 主催 図書館

祝

西南学院創立四十周年

新刊書籍・雑誌

合名会社 金文堂

福岡市新天町
電話 ④3680番
④5989番

積文館書店

福岡市 新天町 ④2080番
東中洲 ③1584番

便利で速い天神町の洋書専門店

海外出版貿易KK社

九州支社
電話 ④2685番
④8418番
東京・大阪・福岡

和洋書籍・文房具・洋品雑貨
図書館用品・事務用器械

丸善株式会社福岡支店

福岡市上西町十八番地
電話 ③四八三一—三番
振替福岡五〇〇〇番